

私はソーシャルワーカー

鹿島丈夫（鹿島丈夫・熊谷まゆみ社会福祉士事務所）

「私はソーシャルワーカー」というテーマで原稿の依頼をいただきました。66歳になり、成年後見の活動以外はソーシャルワーカーとしての活動をほとんどしていませんので、何を書けば良いのか迷いました。でも、大学卒業後ずっと社会福祉に関わる仕事をしてきましたので、その中で自分がソーシャルワーカーであることをどのように意識してきたのかを書くことにしました。

20歳代は県の社会福祉協議会に勤務しました。ソーシャルワーカーとの意識はなく、若さでムキになって仕事も含め様々な活動にのめり込んでいました。その後児童養護施設に勤務し、理念を持った上司、先輩の下で子どもに必死に関わっていました。わずか3年半でしたが社会福祉専門職としての仕事、活動の視点を学び、その後の基礎になったように感じています。でも、この時期も特にソーシャルワーカーについて考えたことはありませんでした。

児童養護施設を退職して、再度社会福祉協議会に就職しました。今度は市の社会福祉協議会で、直接市民と関わり、イメージしていた社会福祉協議会の地域組織化活動をさせてもらい、仕事に充実感を持つことができました。しかし、行政機関の一角に事務所があり、行政職員が兼務で上司であったり、天下りの行政職員OBが事務局長であったり、30年前の社会福祉協議会はどこでも同じような状況でしたが、実践環境はあまり良くはありませんでした。

あくまでも民間の立場で、社会福祉協議会の理念に基づいた実践をしようとすると、様々な軋轢がでてきます。理事会で決定する事業計画があり、事業を執行する事務局では天下りや兼務の管理職がいる中での一職員です。そんな時、「自分はソーシャルワーカーだ」、自分の拠って立つのは、社会福祉協議会の組織の一員としてではなく、ソーシャルワーカーの立場だと勝手に思い込むようにしていたような気がします。でも、日本ソーシャルワーカー協会の会員でもなく、会の存在は知ってはいましたが、理念や活動に付いての知識はありませんでした。社会福祉専門職はソーシャルワーカーだという程度の認識です。

誘われて、12年間勤めた社会福祉協議会を退職して介護福祉士養成校の教員になりました。学校のあった県では、県のソーシャルワーカー協会の活動が盛んで、県の協会の会員になり、日本ソーシャルワーカー協会にも入会しました。介護福祉士養成校は二校、通算で9年、社会福祉の現場を目指す若い人達を育てる仕事をしました。支援を必要とする人達と向き合う若い人達に、ソーシャルワーカーの価値観・倫理が根付くにはと、ソーシャルワークについて最も考え、勉強した時期でした。

最初に勤めた介護福祉士養成校の校長から、国家資格を目指す学生を育てているのだから、君も資格を取ったらと勧められ社会福祉士の資格を取得しました。それまでソーシャルワーカーであることと、資格は別とと思っていましたので、社会福祉士の資格にあまり関心はありませんでした。しかし、専門学校を退職してからもソーシャルワーカーとして活動をしていく上では社会福祉士の資格はかなり役に立ちました。

それに個人的なことですが、高齢期、自分は田舎の方が暮らしやすいと考え、40歳代前半には田舎で暮らす家を見つけていました。田舎に移るのは余力のあるうちと考えていたので、40歳代後半に今の住まいに転居しました。その年齢で伝の少ない田舎で社会福祉関係の仕事を見つけるのは難しいと予測していましたが、社会福祉の仕事に就いていなくても、ソーシャルワーカーとして何らかの活動は続けたいと思っていました。どんな事をしていても社会福祉士であると名乗れるのは、好都合だと思いました。

実際に田舎に移り住みましたら、新しく開校した介護福祉士養成の専門学校の教員への誘いがありました。通勤には時間が掛かりましたが6年間勤め、50歳代半ばで退職して、知り合いと二人で社会福祉士事務所を開業しました。確かな見通しがあつての開業ではありませんでしたが、自由な立場でソーシャルワーカーとして活動したいと考えていました。

当初予定していた相談はあまりありませんでしたが、非常勤講師の仕事やグループホームの外部評価の仕事などを紹介され、なんとか生活はできました。決まった仕事があるわけではないので、病院の外から精神障害者の地域生活移行を支援する活動や、スクールソーシャルワーカーなど、新しい分野の活動に声を掛けられることもありました。

60歳を過ぎて就いたスクールソーシャルワーカーの活動は、私にとって未知の分野でした。学校の中に身を置いてソーシャルワーカーとして活動する、これまでにない体験でした。学校の先生方にとっても、ソーシャルワーカーという異質の人間が入ってくることに戸惑いがあったと思われます。他の専門職の領域での活動で、ソーシャルワーカーであることを強く意識させられました。草創期の医療ソーシャルワーカーの人達もこんなだったのかなと勝手に想像したりもしました。

学校で出会った子ども達が直面している問題は実に様々で、厳しいものでした。それに子育て世代の貧困は想像以上でした。特に組織的な後ろ盾もなく、支援のためのサービスを持っているわけでもない状況で、自分の専門性だけで活動する。ソーシャルワーカーとしての力量が問われ、ソーシャルワーカーであることをこれまでで最も意識しました。子ども達と、親と、先生と、専門機関の人達と、地域の人達と、多様な関わりでした。スクールソーシャルワーク

に関心を持ち、正職員の相談員を辞め、不安定なスクールソーシャルワーカーの活動を担ってくれる若い人が出て来てくれたので、4年でスクールソーシャルワーカーの活動を離れました。

これまでは、声が掛かればできる範囲での活動を引き受けてきましたが、これからは、できる範囲を狭めてなるべくお断りするようにしています。ただ、成年後見の活動だけはもう少し続けることにしています。それもソーシャルワーカーならではの成年後見活動をと意識しています。